

Title	御伽草子から古浄瑠璃へ：「こあつもり」の展開とその背景
Sub Title	
Author	佐谷, 眞木人(Saya, Makito)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1999
Jtitle	三田國文 No.29 (1999. 3) ,p.26- 35
JaLC DOI	10.14991/002.19990300-0026
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19990300-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

御伽草子から古浄瑠璃へ

——「こあつもり」の展開とその背景——

佐谷 眞木人

説経、古浄瑠璃の『こあつもり』は近世初期に流行した作品である。内容は『平家物語』に描かれる「敦盛最期」の後日談で、敦盛の遺児が捨てられて成長したのち母と再会し、更に父の亡き後を訪ね、父の亡霊と会うというものである。この作品については、内容を同じくするお伽草子が存在し、また古浄瑠璃正本としても広く巷間に流布したことが確認できる。本論考では、それらの本文を比較検討するとともに、幸若舞曲『敦盛』との関係をも視野に入れつつ、その本文の成立背景について考察したい。

まず、古浄瑠璃の伝本について確認しておきたい。

- ① 正保二年刊、草紙屋喜右衛門板（古浄瑠璃正本集第一、十九）
- ② 刊年未詳、鱗形屋孫兵衛板（説経正本集第三、四十四）
- ③ 寛文元年刊、板元未詳、『一切記』

（古浄瑠璃正本集第三、五十八）

現在、活字化されている本文は以上、三種である。なお、②については『説教正本集』解題において、東大霞亭文庫本（刊

年未詳、一部欠）の復刻であることが明らかにされている。他に享保二十一年板もあるので、計三種の板の存在が確認でき、最も流布した本文である。また、未翻刻の本文としてこの他に貞享から元禄頃の刊本で「天下一薩摩浄雲直伝」の刊記を持つ本（前島春三氏旧蔵）が存在することが報告されているが、現在の所在は確認できない。水谷不倒氏は①について「舊刻外題本目録」の記載により、藤原吉次の正本としている。^②

この作品が説経の系統に属するものか、古浄瑠璃の系統に属するものかについては、これまでも度々論じられてきた。前記の薩摩浄雲や藤原吉次といった名前から判断すれば、古浄瑠璃ということになろうし、また語法の面や寺社縁起との関わりから説経に近いとする室木弥太郎氏の考え方もある。信多純一氏は「説経と古浄瑠璃と、一方だけに片づけないでよいのではないか。子敦盛という題材は、古説経にあつてよい曲目ではあるが、それを早く古浄瑠璃でも取り入れて考へればよいと思ふ。」と記している。^③私はこの考え方に基本的には同意しているが、そもそも薩摩浄雲や藤原吉次といった有名な人物の名前が出てくるあたりに注意が必要なのではないか。伝本の多さか

らいつても、この作品はよほど流行した作品だったようである。たとえこれらの太夫が語ったとするのが後世の仮託であつたにせよ、そこにはそれだけ古浄瑠璃として古くから語られていると信じられる根拠が少なくとも存在したはずなのである。

そこで、この作品が本来説経か古浄瑠璃かという問題はひとまず棚上げして、これらの語り物の「こあつもり」を古浄瑠璃系と呼ぶこととし、活字化された三種の本文の比較・検討から始めてみたい。本作品の前半部が幸若舞曲「敦盛」に拠っていること、また、後半部についてはお伽草子「こあつもり」に近似していることは既に室木弥太郎氏に指摘がある。つまり本作品は幸若舞曲とお伽草子の内容をつなぎ合わせた如き本文を有しているのである。但し、室木氏はお伽草子とは「非常に似ているが、直接の関係はなさそうである」と述べておられる。この点については後に論じる。そこでまず、幸若との関係について確認しておきたい。

前記の三種の本の前半部は全て、幸若舞曲「敦盛」を利用しているが、そのうち②の鱗形屋板では一・二段目に相当する。一方、①の正保二年板は二段目の途中までが幸若相当部分で、章段の区切り方が不自然である。これは、鱗形屋板にある熊谷直実の高野への道行の部分が省略された結果、二段目が短くなりすぎることに配慮した結果であろう。なお、③の一切記も同様に道行文を欠いているが、三段目を北の方の消息から語りはじめる点は鱗形屋板と一致している。幸若との関係においては、鱗形屋板が最もよく幸若の原型を留めているといえよう。

次に、各正本間の本文の異動について検討してみたい。まず、

正保二年板と一切記には共通している点が多く見られる。三段目において北の方が捨てた若君の許へ三十日間通つたとする点や、六段目（一切記は五段目）において「なになげいくたこやのくさまくら つゆときへにしわれなうらみそ」という敦盛の和歌と、それに対する「いにしへのこひしき人はたへはて、けふみつくきのあとを見るかな」という北の方の返歌が記されている点も同じである（鱗形屋板にはこれらの和歌はない）。一切記は本文の変更や増補の度合いが他の本にくらべて大きく、三本のうちでは最も後出の本文であると推定される。『古浄瑠璃正本集』第三解題において横山氏は、「一切記は正保二年板「こあつもり」によってゐる」と記している。本文を比較してみると確かに一切記は正保二年板と近似する表現が多いのであるが、部分的には鱗形屋板に近い箇所も散見する。以下に具体的に見てみたい。

月日に関もりすはらねば、なゝ月ははや過て、九月のわづらい、あたる十月と申には、御さんのひほをとき給ふ。取上見れば、玉のやう成、若君也。みだい此わかを御らんじて、「くはほうすくなき、此若や。つまのあつもり、うき世にましまさば、いかばか悦び給ふべきに、母ばかりを便にて、生れきては有けるぞ、などたいないにて、ゆ共水とも成ならば、か程に物は思はし物、あゝものうや」と、こへもおしまずなき給ふ。

おつる泪のひまよりも、くどきごこそ、あはれなれ。「此若をいか成いわきの、かげにても、そだてゝ、つまの

かたみに、見たけれど、當代と申するは、源氏はさかふる、御代なれば、平けとだにきけば、おとなしきをば腹きらせ、おさなきをばさしころし、たいないまでさがすよしを聞ぬれば、うきものゝふの、手にかけて、ふたゝび、うきめを見んよりも、いか成しづの山がにも、すてばや」と思ひ召、

(鱗形屋板三段目)

ひかすをゝくさせたまひしか、あたると月と申には、皆さんのひほをとかせたまふ。たまのやうなるわかきみなり。ひめきみ此よし御らんして、「あつもり、うきよにましまさは、さこそうれしくおほしめさんに、むなしくならせたまひて、いまははや、へいけに一そくたるへき身は、おとなしきはくひをきり、いとけなきはみつにいれ、たいないまでもさかしたし、ころすよしをきく時は、なとたいないにて、ゆともみつとも、なるならば、かほとに物はおもはし」と、きへいるやうにそなけかれける。ふたゝひうきめを見んよりも、すてはやと思召、(正保二年板二段目) 月日せきもりすゑされは、御身いたはり、打なやまれしか、ついに若君を、もうけ給ふ。御子取上げたまへは、誠に事もなゝめに、いつくしきしやうしん也。「扱もくくわほうなの此君や。父あつもりの、うき世にましまさは、さこそよろこひたまふらめ、人ことに、いよやうかつがう有へきに、むかしにかはれるよの有さま、誠にあさましき、母一人たよりとし、むまれ出ては、有けるそや、なとたひなひにて、ゆともみつきも、成ならば、今の思ひは、よもあらし、あさましさよ」と、なき給ふ。

おつる泪のひまよりも、「よししく此上は、いか成いわ木のかげにても、そたて上、つまのかたみに、みたけれども、今はけんしのと也て、平家の、すへくたるべき身は、たひない迄もさかされ、おとなしきおは、さしころし、今だやうしやう成を、かもとかつらのおち合なる、いなせかふちゑ、ふしすけにすると聞、又もやうきめを、みんなりも、すてはや」なそと思召、(一切記三段目)

右の引用箇所は、敦盛の北の方が、若君を出産する場面である。三種の本文は表現が近似しているものの、正保二年板は明らかに省筆の度合いが高く、他の二本が二箇所にかけて表現している北の方の言葉が、一か所に強引に纏められている。そのため、「いかなる岩木の陰にても育て上げ、夫の形見に見ばや」といった表現が削除されていて、情感が損なわれている印象を受ける。ここでは明らかに、一切記は鱗形屋板のごとき本文に拠っているとされる。また、加茂社に参籠した若君に明神が示現する場面では、鱗形屋板と一切記が共に「おきなと現じたまひ」としているのに対して、正保二年板は「老僧と身を變じ」、かせ杖をついて現れている。

これらの例からも明らかのように、一切記の依拠本文は現存する正保二年板、鱗形屋板のいずれとも言えず、それらとは異なる、より古態の本文を元にして可能性が考えられる。更に、一切記は他の本には見られない独自の増補・改変を行っている。例えば、一段目では、一の谷合戦の場面を幸若ではなく『平家物語』巻九「敦盛最期」に拠っている。また、二段目に

は、同じく『平家物語』巻九「知章最期」「浜軍」からの増補が見られる。(これは本筋とは関わらない話である) また、三段目には、熊谷直実の元に押し入った強盗が、直実の身体から出る息が金色であることに驚き、仏道に帰依するという説話を載せている。これらの説話が増補された結果、他の本に比して分量が多くなっている。更に、興味深いのは二段目末部において、熊谷が「みかけのさと人」に敦盛の「せきたうを切らせ、びやう所にすへおき、くわこせうりやうとんしやうほたいと、ゑかうせり」という記述を載せていることである。この石塔は須磨海岸に今日も残されている。室町時代末期の「須磨寺参詣曼陀羅」に既にその姿が見えるが、「こあつもり」系統の作品に敦盛の石塔のことが記されているのはこの作品が最初であろう。このような実在の名所を取り込む形で作品が膨らんでいくのである。

それでは、正保二年板と鱗形屋板のいずれがより古態を留めているのであろうか。これについて、信田純一氏は「両者は兄弟のやうな関係にあるのではないか。すなはち、この両本より前に、古い語り物があつて、それをそれぞれの立場で、省略し、按配した本文の系統に立つてあると考へるのである。」と述べておられる。そして熊谷の高野への道行を正保板が欠いていることや、愁嘆の場の文章の詳しさなどから、鱗形屋板の本文により古い語り物の姿が残されていると指摘しておられる。

この信田氏の指摘は基本的には首肯しうるものであるが、注意をしておく必要があるのは、これら二本が共にかなり下った本文であり、前記の一切記を含む共通の(単一の)親本を認定

するのはかなり困難であるということである。例えば、一切記も正保板同様、熊谷の高野への道行を欠くが、三段目の冒頭は鱗形屋板と一致するので、この本が正保板を直接の典拠としていないことは既に述べたとおりである。一切記はおおよそのところ、省略の多い正保二年板に近く、かつ部分的には正保二年板程には省略されていない鱗形屋板に近似する箇所もあるのである。一切記と正保二年板との共通の祖本を推定するのは比較的容易であるが、その場合には今度は逆に推定した祖本と鱗形屋板との距離が大きく開いてしまう。つまり我々が手にしている正本はおそらく幾度もの変更を加えられた後の結果であつて、その背後には失われた何種類もの正本が存在したと推定されるのである。

二

次に、古浄瑠璃系正本類とお伽草子の関係について、検討してみたい。およそ以下のような推測が成り立つ。説教・古浄瑠璃の「こあつもり」は、一、二段目に幸若舞曲「敦盛」相当部分があり、三段目以降が都に残された北の方のその後を語る内容である。しかし、室町期に既にお伽草子の「子敦盛絵巻」が存在し、また能「生田敦盛」⁸⁾が存在することから考えても、この作品が本来、幸若「敦盛」を増補する形で成立したものとは考えにくい。恐らくこれは古浄瑠璃の常套手段として、幸若成立後にその本文を利用したものである。とすると、次に問題になるのは、三段目以降のお伽草子相当部分が元来、独立した作品として存在したのかどうかという点である。

お伽草子には大きく分けて、古絵巻系統（以下「絵巻」と略称）と渋川板系統（以下「御伽文庫本」と略称）の二種の伝本の存在が知られている。その最大の違いは、絵巻が熊谷直実と平敦盛の組み打ちから筆を起すのに対して、御伽文庫本は敦盛の北の方の消息から筆を起しているという点である。その結果、御伽文庫本の本文は、冒頭部が説経、古浄瑠璃の三段目冒頭と一致する形になる。以下に御伽文庫本と鱗形屋板三段目冒頭を比較してみたい。

扱も敦盛の北の御方は、都西山の傍に深く忍び給ひけるが、敦盛の討たれさせ給ひぬるときこしめし、夢か現かこはいか成ことぞと、ふし沈み泣き給ふ。（御伽文庫本）

そののち、その比あはれをとゞめしは、おむろの御所におはします、あつもりのみだい所にて、しよじのあはれをとゞめたり。つまのあつもり、さいこくにて、うたれ給ふと聞し召、天にあこがれ、地にふして、もだへこがれて、なげきかなしみ給ひける。（鱗形屋板）

表現はかなり異なるが、共に敦盛の討ち死にの報に接した北の方が、嘆き悲しむことから筆を起している点は共通するといつてよい。古浄瑠璃系本文の場合は、既に一・二段目において敦盛と北の方の出会いが語られているので、この語りだしは不自然ではないが、御伽文庫本の場合は冒頭に当たるので、右の書き出しはいかにも唐突な印象を受ける。この書き出しについて松本隆信氏は「絵巻にある一の谷合戦の条を省略したため

ではないかと思われる」と推定しておられるが、問題はなぜそのような省略が起きたのかということであろう。

もともと、古浄瑠璃作者は、幸若舞曲や平家物語を利用して作品を作る傾向が強い。その場合、元来別の作品として存在したものを強引につなぎ合わせるのはよくみられることである。この「こあつもり」においても、元々絵巻にあった一の谷合戦の部分、幸若によつて置き換えたものと思われる。例えば、お伽草子は敦盛が北の方に形見として十一面観音と紫壇の柄の刀を残している。ところがこのような記述は幸若にはない。そこで幸若からの引用部分にこの形見を残すことを挿入しているのである。

そこで以下にお伽草子と古浄瑠璃系の本文を比較検討してみたい。

まず、若君が加茂社に参籠する場面を見てみると、

満ずる暁、年の齡八十ばかりの老僧、かせ杖にすがり、かの児の枕上に立ち仰せ有りけるは、「あはれや汝、いまだ見ぬ父をかほどに思ひけるか。これより末、津の国昆陽野生田と尋ねよ」と御夢想ありけり。（御伽文庫本）

七日のまんするあかつきかたに、みやうしんは、らうそつとみをへんし、かうのころもにかうのけき、かせつえにすかりつき、まくらかみにたちよりて、「いかにや申さんこれなるわか、としにもたらぬ、しよくわんにて、いまたみぬちちを、こひしゆかしくおもひつゝ、是まで来る事、けにもあはれとおもふなり、なんちこれより、つのくに

くたこやのへゆけや」とて、かきけす様にうせたまふ。

(正保二年板)

七日の満ずる夜半ばかりに、枕上に立ち添ひ、御夢あるこそあらたなれ。「それ世の中の人の子は、生きてある親をさへ、深く思ふは稀なるぞかし。まして見ず知らぬ父御の行方を、かく命にかけて祈りけるこそあはれなれ」とて、一首の歌をぞあそばしける。

過ぎ去りしそのたらちねの恋しくは 毘陽野生田の小野
の露霜 (絵巻)

右の引用部では、御伽文庫本と正保二年板の本文は共に合せ杖をついた老僧が現れてお告げがあるなどその近似は歴然としている。一方、絵巻は、お告げの内容が和歌で示されるなど、独自の本文を有する。いずれがより古態を留めるかについては、にわかには決し難いが、前二者が語り物の典型的表現であることは明らかであり、それだけ御伽文庫本は語りに近い本文と言えよう。

次に敦盛の亡霊が若君の衣の袖に書いた和歌を比較してみた。

なになけいくいたこやのくさまくら つゆときへにしわれなうらみそ (正保二年板)

何なげくこやのいくたの草枕 露ときえにしわれなおもふそ (御伽文庫本)

恋ひ恋ひてまれに逢ふ夜も夢なれや 現に帰る身にしあら

ねば

(絵巻)

ここでも明らかに前二者が近似している。五句を除けば同じ歌と言つてよい。それに対して絵巻の和歌は全く異なっている。またこの他にも絵巻には和歌が四首含まれているが、それらは御伽文庫本には見えない。また、御伽文庫本には「流涕こがれ」という表現が全体で五箇所使用されている。古浄瑠璃でも正保板では全体で四箇所使われている。これは室木弥太郎氏の指摘にあるように、とりわけ語り物に多い表現である。ところが、この表現は絵巻には見えない。これらの箇所は御伽文庫本と古浄瑠璃の關係の緊密さを表しているといえよう。

一方、御伽文庫本と絵巻のみ表現が一致する箇所は当然のことながら、多くある。例えば、敦盛の北の方については、「少納言入道信西の御孫、洞院の御娘、弁の宰相」(絵巻)「大しやうの入道、しんぜいのためには孫の局の妹、ならのないでん」(御伽文庫本)とする。これらは本来同一の表現と考えられ、恐らくは平家物語に登場する阿波の内侍(弁の内侍とも)を指すものであろう。御伽文庫本「ないでん」は「内侍」の誤読と推定される。この他にも、法然上人が若君を拾う場面では、以下のような表現が見える。

上人これを御覽じて、「衣に包み刀を添へて捨てたるは、いかさまだ人とはおぼえず。助けよとのことにてぞあるらん。または賀茂の明神の御利生にもや」とて、取り上げ下向ありて、乳母を添へてぞ育て給ひける。

(小敦盛絵巻)

法然上人御覽じて、「不思議や刀を添へ、衣にまきて捨てるやうは、たゞ人にては有べからず、いか様これは賀茂の大明神の、御利生也」と喜びて、拾ひ給ひ御下向ありて、めのとを添へ、いつきかしづき育て給ふ。

(御伽文庫本)

右の二本はこの箇所においては、ほぼ同一の本文を有するといつてよい。古浄瑠璃系の本文ではこの箇所は、法然は「平家の討ちもらされの子」であろうと判断して哀れに思い、拾うという記述になっており、「賀茂の明神の御利生」という表現はない。この表現は作品の成立にかかわるものと推測されるので、ここでは古浄瑠璃系本文は後出性が強い。

これらの点から判断して、御伽文庫本は、絵巻と古浄瑠璃の中間的な本文を有するといえよう。これら三系統の本文の生成には幾つかの過程を考えうる。①御伽文庫本は絵巻から古浄瑠璃への過渡的本文である。②御伽文庫本は、古浄瑠璃の祖形と絵巻の両方の影響を受けて成立した本文である。③御伽文庫本を祖形として、そこから絵巻と古浄瑠璃が派生した。④現存する古浄瑠璃の元になった正本があり、そこから御伽文庫本を経て絵巻の本文が成立した。以上四通りの可能性を検討してみた。

まず絵巻が独自の内容を持つ、一の谷合戦の描写部分について検討してみたい。熊谷が敦盛を討つ場面である。平家物語を典拠としていふと考えられるが、どのような系統の本文を利用しているのだろうか。残念ながら、現存する平家物語の諸本

には、絵巻と内容が一致するものはない。例えば、敦盛は遺品として笛と直垂、及び巻物を残している。しかし、平家物語は直垂について言及しない。その中で最も近いのは、笛と巻物を遺品とする四部合戦本であろう。四部本とは、他にも敦盛が討たれる前に名乗っている点や、熊谷に念仏を勧められて、十返唱えたのちに斬首されている点などが一致する。絵巻は四部本に近い平家物語の本文を利用しているようである。古浄瑠璃などの語り物が平家物語を利用する場合、一般に語り本系の本文を利用するのに対して、絵巻の本文の成立はより古いという印象を受ける。松本隆信氏は本文の乱れから、絵巻が御伽文庫本に先行すると推定されたが、そのような点を合わせて考慮すると、絵巻系の本文が三系統の中では最も古態を留めるというのが現存本文を比較する限り、妥当な判断であろう。従つて本文の成立は右の①又は②ということになる。

このことは、御伽文庫本と古浄瑠璃の内容が一致する場面においても言えそうである。これら二系統では、結末部近くで若君が父敦盛の亡霊と対面した前後の北の方に関する記述が多くなっている。まず、若君は父に向かって、「父はこれより都へ御上りありて、自らが母に今一度見えさせ給へ」(御伽文庫本)「ちゝはみやこへのほらせたまひて、はゝうへ様に、たいめんあれ」(正保二年板)と母との再会を求めている。また、若君が都に帰った後も、敦盛が書いた和歌を見て、母北の方が嘆く場面が描かれている。これらの表現は絵巻には見られないものである。

この「こあつもり」説話はもともと母子再会譚をもとに成立

したものであろうということとは以前既に論じたことがあり、ここでは繰り返さない。また美濃部重克氏は賀茂社に伝わる父子再会説話の影響を指摘している。つまり、この作品の主題は母と子、父と子といった親子の關係にあり、敦盛と北の方の夫婦の關係を重視するこれらの表現は後から付け加えられた可能性が高いのである。

藤掛和美氏は渋川板の北の方の消息をもって起筆し、また北の方の出家をもって物語を閉じる点について、「お伽草子本では、「北の方」へと主人公が傾斜して、封建道徳下における女性の生き方に主題が移っている」と述べている。内容から言えば、そういった解釈も成り立つが、むしろ、敦盛の遺児を主体とする物語に、北の方の話が増補され、物語が複雑化したといったほうがよいのではないか。この点もまた、御伽文庫本、古浄瑠璃系の本文の後出性を徴付けるものであろう。

以上の考察を纏めてみると、絵巻本文は比較的成立が早く、その絵巻系本文と近似する語り物の後半部を草子化したものが、御伽文庫系本文ということになる。更に語り物系統の末端にあるのが現存する古浄瑠璃系正本類である。おおよそ以上のような推定が成り立つ。

さて、ここで問題になるのは古浄瑠璃系の本文が結末部において敦盛の北の方が出家後新善光寺御影堂を建てて自ら扇を折り、また若君「ほうどう丸」も東山知恩寺の開基となったとする点であろう。御伽文庫本にはこのような記述はない。また絵巻は若君が証空上人になったとする記事を有する。これらはいずれも後人の付会であろうか。

美濃部重克氏はこあつもりの物語の成立の基盤が知恩寺や御影堂にあると推定された^⑤。しかし、それらの伝承が最も成立の遅い古浄瑠璃系の本文のみにあるという点には留意が必要であろう。むしろ、本文が新しくても、古い伝承の要素を留めていることはあり得るから、それだけで美濃部氏の説を否定することはできない。一方、本文としては最も古い形と推定される絵巻の結末において証空の名が見えることは、この物語がいずれにせよ浄土宗の影響の下に生まれたことを伝えているといえよう。問題は、証空の拠った三鈷寺が浄土宗西山派の拠点であるのに対して、一方の古浄瑠璃と関りの深い知恩寺や御影堂が浄土宗鎮西派に属するという点である。この違いは何を意味しているのであろうか。

南北朝から室町時代の浄土宗の状況を見ると、法然没後の京都で力を持ったのは証空門下の西山派であり、十三世紀後半には鎮西派が京都に勢力を延ばしてくるものの、十四世紀になってもなお西山派の優勢は続いたようである。こあつもりの物語が室木弥太郎氏の推定されたように十四世紀ごろに作られたとすれば、その当時の浄土宗の勢力から言っても西山派との関わりは無視できない。また、こあつもりの類話が天台系の『法華経鷲林拾葉抄』に見えることはよく知られているが、天台宗との關係が近いのは西山派である。

また、古浄瑠璃系の本文を検討してみると興味深い表現が見られる。

そのころ、じゃうどのほうが、二つにわれ、しんざん、

とうざんとて、二つに成、東山のは、ちおんるん、若君は、ぢをんじと、かくを打、明くれ、ぼだいを、とい給ふ、今の百万べん、是也。
(鱗形屋板)

右の文は知恩院と知恩寺の対立を記している。両寺は共に歴史の古い寺であるが、本山を争った対立が室町幕府を巻き込んで表面化するのは大永三年(一五二二)のことであり、その原因は皇室の勅願寺となつた知恩寺が当時急速に勢力を拡張したことにあつた。従つて右の文は一六世紀の浄土宗の勢力関係を反映したものと推定される。

以上の点から判断して、この「こあつもり」説話は当初、浄土宗西山派によつて語られたものが、室町時代の後半になつて勢力を拡大した鎮西派の知恩寺に取り込まれたのではないかという推測が成り立つ。その際に若君が証空上人になつたという結末が、若君が知恩寺を建てたという結末へとすり替えられたのではないか。以上はあくまで状況証拠からの推測に過ぎないのだが、美濃部氏が明らかにされたように、知恩寺にはもともと「こあつもり」に結びつく要素があつたのだから、他派の説話を取り込んで唱導の材としても不自然ではなかつたはずである。このように一つの物語が諸派の間を流転していくことは、さまざまな宗派が勢力の拡張を競つた中世という時代のリアルな現実を伝えていると言えるのではないか。

三

最後に、古浄瑠璃独自の内容について検討を加えてみたい。

古浄瑠璃にはお伽草子や能『生田敦盛』にはない表現がみえる。中でも重要なのは、若君(敦盛の遺児)の名を「ほうどう丸」とすること、若君が熊谷を父の敵と知り、刀を抜いて切りかかるという二つの点であろう。まず、名前について考えてみたい。

敦盛の遺児の名はもともとなかつたものと思われる。正保二年板は「法然の法のかたどり」、「ほうどう丸」と名付けたと名前の由来を記すが、この名はどうも後から加えられたものようだ。理由の一つは、もし古くから名前が与えられていたとしたら、お伽草子とその名を省略するべき理由が考えられないことである。いま一つは「こあつもり」という呼称に因る。

「こあつもり」には「小」と「子」の二種類の漢字を当てることが可能である。「小」を当てた場合、例えばお伽草子の『落窪の草子』が『落窪物語』と区別して「小落窪」と呼ばれることから分かるように、「敦盛」と区別するための呼称ということになる。この場合「敦盛」は何を指すのであろうか。最も適当と思われるのは幸若舞曲の「敦盛」であるが、それでは幸若「敦盛」を取り込んだ古浄瑠璃系の作品が「こあつもり」と呼ばれるのは不自然である。とすると「こあつもり」を「子敦盛」と判断し、敦盛の遺児を指す表現と理解するほうが妥当ではないか。実際、一切記の挿絵には若君が父と再会する場面が若君を「こあつもり」、敦盛を「大あつもり」と表記した箇所がある。とすると、ほうどう丸の名は、名前の与えられていなかった敦盛の遺児を一人の人物として扱おうとする指向が表れたものと考えられる。

次に敵討ちについて検討してみたい。古浄瑠璃系の本文では、

母と再会した若君が、母から父が敦盛であることと熊谷に討たれたことを教えられ、父の仇を討とうとして周囲の者に止められている。これはいかにも近世的な脚色で、息子としては父の菩提を弔うのみならず、仇を討つことが重要であるという認識が社会を覆っていたという事実がこのような表現を導いたのである。中世的な物語は最早、そのままの形では受け入れられにくくなってきたのである。以上の二点は共に敦盛の遺児に一個の人格を付与しようとしている点で共通していると言えよう。これは、中世的な幼童神としての側面を持つ若君が、近世の現実には適応しなくなっているということではないか。哀れな弱々しい存在から、幼いながらに意思を持って行動する人間へと、敦盛の遺児は姿を変えているのである。

以上に検討してきたのは「こあつもり」の物語が展開していく過程である。それはお伽草子から、古浄瑠璃系本文へと少しずつ姿を変えながらそれぞれの時代や語り手の立場を反映している。このような本文の変化のなかに、書写のみによって伝わる物語とは異なる、語り物としての作品の存在形態が伺えるのである。

注

(1) 横山重校訂『古浄瑠璃正本集』第二、四一―頁（昭和三十九年、角川書店）

(2) 水谷不倒『新修絵入浄瑠璃史』（水谷不到著作集）第四卷、昭和四十九年、中央公論社）

(3) 室木弥太郎『増訂語り物の研究』三四七―三五四頁（昭和五十六年、風間書房）

(4) 横山重校訂『説経正本集』第三解題五五三―五五八頁（昭和四十三年、角川書店）

(5) 室木前掲書。

(6) 横山重校訂『古浄瑠璃正本集』第三、五三九頁（昭和三十九年、角川書店）

(7) 前掲注（4）

(8) 「能本作者注文」により金春禪鳳作と推定されている。

(9) 敦盛の北の方のいた場所が、「都西山の傍」（御伽文庫本）、「おむろの御所」（鱗形屋板）と異なっている。これは古浄瑠璃系本文が幸若舞曲「敦盛」の影響を受けたためと推定される。御伽文庫本がより原形に近いであろう。

(10) 松本隆信校訂『御伽草子集』（新潮日本古典集成）三一―頁（昭和五十九年、新潮社）

(11) 室木前掲書。

(12) 拙稿「御伽草子『小敦盛』の形成をめぐって」（『三田国文』第十八号、平成五年六月）

(13) 美濃部重克「こあつもり考」（『南山国文論集』九、昭和六十三年三月）、「中世伝承文学の諸相」、昭和六十三年和泉書院刊に収載）

(14) 藤掛和美「洪川版 御伽草子『小敦盛』の位相—敦盛譚・小敦盛譚の系譜より—」（『後藤重郎教授周年退官記念 国語国文学論集』（昭和五十九年、名古屋大学出版会）

(15) 前掲注（13）

(16) 玉山成元『中世浄土宗教団史の研究』（昭和五十五年、山喜房佛書林）

(17) この問題については前掲注（12）で詳しく論じた。

(18) 『実隆公記』大永三年四月八・九・十・十四・十六日条及び、前掲注（16）参照。

(19) 前掲注（6）六〇―頁

（さや まきと）